

〔教育実践報告〕

「女性学ゼミ」の実験 (3)

小 森 治 夫

はじめに

I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献

II. 学生による「女性学ゼミ」の評価

おわりに

はじめに

前号(『商経論叢』第48号)では、「『女性学ゼミ』の実験」と題する拙論において、「女性学」をテーマにとりあげた私のここ2～3年間のゼミナール活動について簡単な報告をした。

また、本号では、『基礎演習』における『女性学ゼミ』と題する簡単な報告をしているが、それに加えて『女性学ゼミ』の実験(3)と題して、私が鹿児島県立短期大学に赴任して3年目と4年目に担当した「女性学ゼミ」の実験について報告することとしたい。

I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献

まず、私が「女性学ゼミ」でとりあげた5冊の文献について、紹介しておきたい。

最初に、日本における「女性学」のパイオニアの一人である、井上輝子氏の『女性学への招待』(有斐閣選書)をとりあげた。

この本では、女性のライフステージにあわせて議論が展開されており、「女性学」への入門書として、わかりやすい構成になっている。ただ、私からみれ

ば、著者の主張には、「男性敵論」的なニュアンスがあるように思われる。

ここでは、目次を紹介することにより、内容の紹介に代えたい。

プロローグ 女性学の誕生

- 1 つくられる女の子…… 幼児期における性役割の形成
- 2 女子と男子の学校生活…… 教室の中での性役割の形成
- 3 恋愛と結婚…… “結婚幻想” はこうしてつくられる
- 4 母になるということ…… 根強い母性信仰
- 5 働く女たち…… 職場における性差別
- 6 主婦の一日…… なぜ病むのか
- 7 変わる女の一生…… 人生 80 年時代

エピローグ 女性学のセカンドステージ

「女性学」と「男性学」をセットでとりあげるのが、私の「女性学ゼミ」の特徴である。そこで、「女性学」の入門書に続いて、「男性学」の入門書として、日本における「男性学」のパイオニアの一人である伊藤公雄氏の『男性学入門』（作品社）をとりあげた。

著者の男たちへのメッセージは「＜男らしさ＞の鎧を潔く脱ぎ捨てよ！」であり、社会の進むべき方向の提言は「男も女も、家庭も仕事も！」である。また、著者が考案した「男の生活自立度チェック」は、「妻のパンツを外で干せますか？」という質問であり、ユニークな著者の提案は学生たちにも好評であった。私は「男はつらいよ」をもっと女性に理解してほしい。

第1章 悩める“男の一生”…… 現代男性論

第2章 ＜男らしさ＞って何だろう？…… 「男のメンツ」の中身

第3章 男の目で見直す男性社会…… ＜男性学＞の現在

第4章 文化と歴史の中の男と女…… ジェンダー論入門

第5章 男性のための（そして女性のための）女性学入門

第6章 「働く主夫」の生活と意見 …… 体験的主婦論

第7章 ニッポンのお父さんたちへ …… 現代父親論

第8章 もっと群れよう、男たち！ …… “メンズ・ムーブメント”のすすめ

おわりに ぼくが＜男性学＞をはじめた理由

以上が、「演習1」(1年生後期)でとりあげた、「女性学」と「男性学」の2冊の入門書である。

「演習2」(2年生前期)では、まず、短大教育をジェンダーの視点からみた優れたエスノグラフィ^{注)}である、松井真知子『短大はどこへ行く …… ジェンダーと教育』をとりあげた。

本書は、関西のある私立女子短大において、10ヵ月間、著者が学生や教員とのインタビューを通して、あるいは授業参観などから得られた豊富なデータを素材に構成されている。著者が短大教育に関心をもったのは、日本の高等教育がみごとにジェンダー化されており、他の先進資本主義国でも比類のない職業構造における性別分業構造と連動しているからである。学生たちから語られたことは、恋愛、結婚は言うに及ばず、就職、職業と家庭の両立、女性の自立、学校や職場や家庭の性差別という、きわめて広範な内容を含んでいた。短大生の生活と意識を、彼女たちの視点から詳細に記述した文献として、県短の学生と教員は是非一度は目を通すべきであると思う。

第一章 変わりゆく短期大学

第二章 白藤女学院短期大学

第三章 白藤女学院のジェンダー文化

第四章 学生たち

第五章 クラスルーム 1

注) エスノグラフィとは、研究者が研究対象とする日常生活の場に、一定期間滞在してフィールドワークすることによって、すなわち観察、参与観察、文献分析、インタビューなどさまざまな方法を駆使することによって、対象を解釈、分析、記述していくプロセスとその方法をいう。

第六章 クラスルーム 2

第七章 国際化とはどうすることか

第八章 女性学は学生を変えるか

第九章 短大はどこへ行く

付 論 研究方法をめぐって

次に、若い女性ならだれもが興味をもっている結婚の問題をテーマとした、山田昌弘『結婚の社会学……未婚化・晩婚化はつづくのか』（丸善ライブラリー）をとりあげた。20代後半から30代の未婚の男女の結婚願望は強まっているにもかかわらず、結婚年齢が上昇し、独身者が増え続けるのはなぜか。このパラドックスを「社会学的」（＝ものごとをありのままに捉える）に解明しようというのがこの本の特徴であり、現象をうまくすくいあげて説明しようとしている。議論の素材としてとりあげるには、なかなかおもしろい本である。ただ、「女性学」の本ではないので、誤解がないようにしてほしい。

ここでも、目次を紹介することにより、内容の紹介に代えたい。

1 章 結婚論の現在

2 章 結婚難の虚实

3 章 結婚意識の男女差……生まれ変わりとしての結婚

4 章 低成長期の結婚難……国際結婚という帰結

5 章 恋愛の変化と結婚難

6 章 もっといい人がいるかもしれないシンдрーム

7 章 結婚のゆくえ

最後に、家族構造の変化は産業構造の変化を反映するとの視点から、現代を核家族から単家族への移行期と説く、匠雅音『核家族から単家族へ』（丸善ライブラリー）をとりあげた。

著者は、歴史の流れを「農耕社会→工業社会→情報社会」と整理し、それに

対応する家族形態を「大家族→核家族→単家族」と理解する。農耕、工業の労働には肉体的な腕力が不可欠であり、「男性支配の時代」と著者は考える。しかし、コンピューターの登場により、労働に肉体的な腕力は不要になり、頭脳労働の比重があがった。それゆえ、情報社会は「男女平等の時代」になる。また、情報社会においては人間は個人としての能力が問われ、工業社会の核家族から単家族（個人を単位とする家族）へと移行していく。このように、現代の家族形態の変化を、核家族から単家族への移行ととらえることにより、現在発生している社会現象を整然と理解できる、というのが著者の主張である。

学生からのアンケートによれば、「この本は難しい」との感想が多かったが、一つには直前の『結婚の社会学』が平易に書かれていたためと思われる。文体が論文調の本は読みにくいということであろうが、報告の際の内容の要約はほぼできていたので、著者の主張が理解できていないわけではない。ただ、用語の問題もあり、彼女たちには違和感があったのであろう。私には論旨は明解で興味深い問題提起であったので、ゼミのテキストとしてとりあげたのだが、十分活用できなかったのは残念である。

第一部 単家族の誕生

- 一 家族構造の変遷
- 二 家庭内労働の分離
- 三 家族関係の中核
- 四 男女関係の変質
- 五 出生率低下
- 六 労働の今後

第二部 単家族の新世代

- 一 勘当と離婚
- 二 親権と子権
- 三 教育の展開
- 四 新世代へ

Ⅱ. 学生による「女性学ゼミ」の評価

学生が「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、1999年1月にゼミ生10名を対象に、簡単なアンケート調査を実施した。回収できたのは8名分で、回収率は80.0%である。

アンケート項目は三つである。

一つは、「あなたは『女性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」という問いに対して、「役に立つと思う、役に立たないと思う、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点が役に立つと思いますか？」と問うものである。

三つ目は、「ゼミでは5冊のテキストをとりあげましたが、それぞれの感想を教えてください」というもので、とりあげた5冊のテキストそれぞれについて、感想を書くための自由回答欄を設けた。

サンプル数が少ないため、必ずしも正確な評価とは言えないが、「『女性学』を学んでよかったか？」の問いに対しては、8名全員が「よかった」と回答している。具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

「女性を取り巻く現状、これからどのように自分が生きていくか、考える機会になった。」

「今の女性の立場について考えることができたから。」

「身近な問題なので、今後のためにもなるし、接しやすい問題だった。」

「いろんな視点から、社会または家庭の中の女性の在り方を学べた。」

「自分の意見や考え方について考え直せたところ。」

二つ目の「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思うか？」の問いに対しては、6名が「役に立つと思う」と回答し、2名が「どちらともいえない」と回答している。まず、具体的な役に立つ点について紹介すると、次のようなものである。

「会社などに入って、いろんな問題にぶちあたると思うが、それなりに少しは対応できるような気がする。」

「結婚に関することなど、いずれ直面する問題について、参考になることを学べた。」

「今まで知らなかったことをたくさん知って、これから女性として生きていく上で、得な人生が送れそう。」

他方、「どちらともいえない」と回答した者の意見を紹介する。

「自分が『こうしたい』と思っても、今の状態だと何もできないかもしれないと思う。」

三つ目の「5冊のテキストの感想」については、次のとおりである。

①『女性学への招待』

「初めて読んだ『女性学』で、わかりやすかった。」

「初めて『女性学』についての本を読む人には良いテキストだと思った。」

「『女性学』がどういったものなのかよくわかった。本がけっこうわかりやすく、討論しやすかった。」

「初めて『女性学』にふれ、どういうものかを知った。でも、著者によってかなり言い方が変わるなあと思ったのは後から（いろいろな本を読んでから）。」

「どちらかという、女性のほうに偏った考え方だったような気がする。」

「大げさに書いてあるところもあったが、『女性学』へ入門するという点ではよかったと思う。」

「有職主婦と専業主婦のそれぞれの特徴について知ることができた。将来の参考になり、ためになった。」

「今までの常識的な考え方を見直す本だった。」

②『男性学入門』

「男性がどんな風に思っているのかがわかって、けっこう楽しく学べた。」

「あまり考えたことのない男性の立場や考えが、『女性学』ともつながりがあり、とても参考になった。」

「『女性学』とは違った立場で物事を考えることができたのでよかった。」

「今まで知らなかった『男性学』にふれることができてよかった。」

「違った立場から見れて、おもしろかった。」

「男性も大変だな、と思った。」

「わかりやすく、男の人にも、きっとそう考えたことはないだろうけど、辛いんだなあと思った。」

「両親世代の人たちに読んでほしいような本だった。」

③『短大はどこへ行く』

「現代の短大生の心理と行動が、よく書き表されていたと思う。」

「日頃、私たちが持っているような考えや、短大生の実態がよく書いてあって、興味深い本だった。」

「県短以外の短大の状況についてもわかったし、自分以外の短大生の意見を知ることができよかった。」

「今の短大の状況が見れて、あらためて県短のよさがわかった。」

「県短とはいろいろ違っているところがたくさんあり驚いた。討論が楽しかった。」

「まとめにくかったことを覚えている。女子短大の行く先を考える内容は

おもしろかった。」

「本の内容が少しむずかしかった。」

「これを先に読んでいたら、もっと違う短大生活を送れたかもしれないと思った。」

④『結婚の社会学』

「自分の結婚に対する価値観がどうなっているのかがわかり、考えさせられた。」

「結婚というものを深く考えさせられて、これから役に立つと思う。」

「結婚に対する考え方が話し合いやすく、いろんな意見が聞けてよかった。」

「結婚の晩婚化について興味があったので、その理由がわかりよかった。」

「とてもわかりやすく、発表のときもまとめやすかった。」

「読みやすいテキストだった。」

「興味ある内容ではあったが、あえていうと、まだ男性中心的に書かれていたように思える。」

「楽しかった。」

⑤『核家族から単家族へ』

「家族の形態の変化を学んだ。自分が作る家族と、今まで自分が育ってきた家族など考えさせられた」

「家族の構成の変化について知ることができ、知識がふえてよかった。」

「家族が時代の移り変わりによって変化してきたことがわかった。難しかった。」

「本が少し難しく、まとめるときに苦労した。」

「文章が私にはむずかしかった。」

「この本も少し内容がむずかしかった。」

「少し難しかったように思う。」

「難しかったかな (!?)」

おわりに

早いもので、「女性学ゼミ」も3度目の卒業生を送り出す時期になった。

私にとっては、「女性学ゼミ」のテキスト選択が大変で、最初は試行錯誤の連続であったが、ようやくいくつかは定番と言えるテキストができてきた。

『『女性学』と『男性学』を同時にとりあげるのがおもしろい』と評価してくれた友人がいて、意を強くしているのだが、『女性学への招待』『男性学入門』の2冊の入門書はほぼ定番と言えそうである。

『短大はどこへ行く』もなかなか好評なので、短大生活1年を経た時点で、過ぎた1年を振り返り、来たる1年を展望する意味で、とりあげてみるのもよいだろう。

ここまでは決まっているのだが、頑張れば2年生前期の「演習2」で、あと2冊ほど読むことができる。私の希望としては、日本社会の特質（あるいは鹿児島社会の特質）をジェンダーの視点からとらえ、それを多少でも変えていけるという展望をもたせられるような、そういうテキストが欲しいのだが、何かアイデアのある方は是非お教えいただきたいと思う。

今のところ、岡沢憲芙『おんなたちのスウェーデン』（NHK ブックス）を考えているのだが……。